突撃インタビュー

編集部ハルちゃんが行く！

ハルちゃんって誰？

本誌の編集担当者。慢性的な運動不足を解消すべく、去年から日曜午前中は近所でヨガをしております。ヨガというとストイックなイメージがあったけど、レッスンに誘ってくれたのが近所の行きつけの飲み屋で知り合ったお姉様方ということもあり、レッスン前に先生から「体調はいかが?」と聞かれると「…夜中3時まで〇〇で飲んでました…」的な回答続出で心強いのだった。しかし夜の3時まで外で飲んでたら、私なら絶対起きられん。さすがです姐さん方！

今回は塗装機械や圧造機械、精密洗浄を手がける旭サナックさんにインタビュー。塗装と圧造では半世紀に及ぶ歴史をもつ会社ですが、幅広い分野にはどんな関連が? そもそも圧造ってナニ!? 今回もゼロからの出発になりそうです…。

第73回目　旭サナック 株式会社

旭サナック株式会社

(本社)
〒488-8688　愛知県尾張旭市旭前町5050
TEL (0561)53-1212(代表)　FAX (0561)53-2721
http://www.sunac.co.jp

お話を伺った方

代表取締役
社長
甘利 昌彦　氏

理事
塗装機械事業部
副事業部長 兼
工場長
小阪 康正　氏

理事
圧造機工場
工場長 兼
資材調達部長
田中 道博　氏

NC工場
工場長
森　寿恵盛　氏

□■今回のお題：塗装・圧造・精密洗浄■□

会社の沿革は？

ハル:御社は現在、塗装機械事業部、圧造機械事業部、ニューコンポーネント（以下、NC）事業部の三本柱でさまざまな業績をあげられていますが、まずは沿革から教えていただけますか?

甘利:当社は1942年、オークマ㈱創業者の故・大隈栄一氏の創業により、「旭兵器製造株式会社」として設立されたのがはじまりです。45年に商号を「旭大隈産業株式会社」に変え、58年に国産第1号のエアレス・スプレー塗装装置の製造販売を開始、翌59年には冷間圧造機械の製造販売を開始しました。そして92年、会社創立50周年を記念して商号を現在の「旭サナック株式会社」に変更したのです。

ハル:塗装機械も圧造機械も、50年以上の歴史をお持ちなのですね。どうして当時、塗装と圧造を選んだんでしょうか。

甘利:塗装については、戦後、当社とアメリカの新しい塗装機の開発者が知り合い、パテント技術を譲られたことがきっかけです。圧造は、このあたり一帯がネジやボルトを生産する集積地になっていたため、圧造機械に着目したのです。どちらもユーザーは多いもののニッチ産業だったことも着目した理由のひとつでしょうね。

ハル:出合いのチャンスと地の利を生かした選択だったのですね。

甘利:そしてノズルやポンプなど塗装機械のオリジナル技術を洗浄装置に発展させ、96年にNC事業部を発足したのです。

ハル:なるほど、ニューコンポーネント事業部といってもまったく新しいジャンルということではなく、御社の長年の技術が応用されたものなんですね。

甘利:そうですね。売上比率を大まかにみると、塗装が5割、圧造が4割、NCが1割といった状況です。

塗装機事業部の特徴は？

ハル:塗装機事業部では、具体的にどのようなことを手がけているんですか?

小阪:手動・自動の塗装機器や塗装システムを手がけ、防錆・保護・美粧など、あらゆるフィールドにわたっています。近年では、耐薬品・耐菌・耐水・耐油・耐火など、さまざまな分野で要な役割を果たしているんですよ。

ハル:塗装って、ただ「いかにキレイに塗れるか」を追究するだけじゃなかったのですね！「美粧」のイメージしかなかったです(汗)。そうだよなあ、「顔の塗装」であるお化粧だって、美粧のためのファンデーションだけじゃなく保湿用だの紫外線予防用だのいろいろ機能が分かれてるもんなあ。御社の塗装機械は主にどのようなジャンルで使われているんですか?

小阪:塗装は範囲が広いため、主力対象市場はこちらでコントロールしています。現在は自動車のボディや部品が主力ですね。ほかにも建築産業の工業塗装分野もあります。プレハブの建材やユニットバスの塗装などです。加えて造船や航空機、建設機械など。近年は復興事業などの影響で、水道管の塗装もありますよ。

ハル:うはあ、自動車や飛行機からユニットバス、水道管…ほんとに幅広いですね。

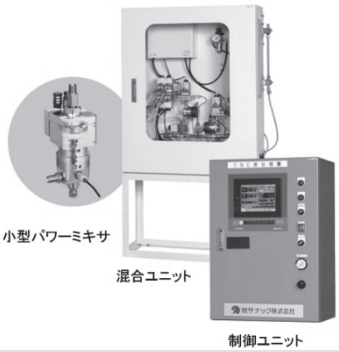
小阪:そうですね。携帯電話のボディ塗装の需要も増えています。

ハル:そういえば御社は、第10回（平成24年度）の新機械振興賞で、中小企業庁長官賞を受賞されましたね。

小阪:CNC二液塗装機シリーズですね。従来の混合装置では水性二液ウレタン塗料のような難混合塗料を確実に混合することは困難だったのですが、新たな混合装置を開発することでこの問題を解決したのです。

ハル:長官賞を受賞するなんて、ほんとに画期的な技術なのだろうなあ。

甘利:二液塗装機は以前から当社が注力してきたのです。塗料の水性化に



左の写真は、新機械振興賞で中小企業庁長官賞を受賞したCNC二液塗装機シリーズ。
紙面の都合上ご紹介できませんでしたが、各事業部にはそれぞれ技術センターが完備されており、「お客様の実験室」として活用されています。右の写真は明るくてきれいなショールーム♪
また社員向けには、実技のみならず座学も含め加工技術をしっかり学べる「技能塾」があります。最近では「技能塾に入りたい」と入社を希望する学生さんもいるそうですよ！

伴い混合の課題が生じていたのですが当社の社員たちが試行錯誤を繰り返して克服してくれたのですよ。それが評価されたということは、素直に嬉しいですね。

ハル：美粧しかイメージがなかった自分がいよいよ浅く感じられるなあ。ほかにも御社の強みはありますか?

小阪：重要部品を内製化しているため、複雑な部品にも対応できます。塗着効率（塗料を無駄にしない効率）の高さも特徴ですね。また、車の部品はパーツによってさまざまな素材が使われているため、それぞれの素材に合わせて塗料も変え、同じ色目になるようにする技術力にも定評があります。

ハル：全部同じ塗料で、一気にガーッと塗ってるのかと思ってました！

小阪：たとえば素材が異なるものを、まったく同じようなメタリック色になるよう着色することには技術を要するのですよ。でも長年の経験がありますからね。今までは「塗れない」とされていたものでも、当社の技術で塗れるようになったものも多いんですよ。現在では一分野に特化せず、幅広くさまざまな分野を柔軟に手がけています。

圧造機械事業部の特徴は？

ハル：では次に圧造機械事業部なのですが…すみません、圧造機械ってどんな機械なんでしょうか?

田中:ひと言で言うと「複雑形状部品の金属塑性加工機」です。1本のワイヤ材から最大7回の加工を繰返し、ネジやボルト、さまざまな複雑形状部品を塑性加工で生産します。切削加工に比べ生産性に優れ、製品強度も向上します。当社は完全に個別受注生産で年間60 ～70台の圧造機を製造しており、自動車部品が主力です。1つの機械で1500種くらいの部品がつくれるんですよ。

ハル：1台でそんなに！　御社の特徴はどのような点ですか?

田中：加工の設備を社内に持っていることですね。超大型の加工設備を導入し、パーツ加工から組立まで一貫体制をとっています。加工と組立の意思疎通がスムースになり、加工のスイートスポットもつかみやすくなります。また、ユーザーによって機械の使い方のクセや考え方が異なるのですが、これらの個別希望にスピーディかつきめ細かく対応できます。

ハル：ユーザーから見れば、心強いかぎりですね。

田中：圧造機は30年間以上使われるものが多いので、アフターサービスは他分野に比べても特に重要になります。この対応力も、当社の強みと言えますね。

NC事業部の特徴は？

ハル：続いてNC事業部ですが、こちらでは電子デバイスの精密洗浄がメインとか。

森：そうですね。前述にもあったように、当社のコア技術を応用させて、超高圧マイクロジェット洗浄装置などの設計・製造・販売を行っています。

ハル：どんなものが対象なんですか?

森：大型液晶パネルや半導体、スマートフォン、MEMSなど電子デバイスの生産工程における精密洗浄です。当社の半世紀にわたる霧化技術の開発をベースに洗浄液を微粒化し、その衝突エネルギーで洗浄する装置を商品化したのです。砥粒加工の関係で言えば、半導体シリコンウェハ加工のパッドコンディショニングに応用されています。また精密洗浄のほかに、精密コーティングを実現する機器やシステム開発も手がけているんですよ。

ハル：そうか、精密洗浄オンリーではないのですね。

森：精密洗浄分野に参入してみたところ、ものすごくアップダウンが激しいうえに変化のスピードも早い分野だということがわかり、当社の技術を応用できる精密コーティングも手がけるようになったのです。今後はスプレーコーティング技術をどのように発展させていくかがポイントですね。

ハル：御社の精密コーティング装置には、どのような特徴があるんですか?

森：塗布する材料およびワークの条件により、最適なコーティングノズルの選定ができます。霧化粒子の適正化と微少流量の専属安定供給システムが確立されているので、スプレー方式の優位な条件を提案できるんですよ。

今後の展望は？

甘利：ひとつは「日本のものづくりを支える機械メーカーでありたい」ということです。ユーザーないしターゲットとなる市場が生き残りをかけて変化を続けているなか、当社の機械がいかに貢献できるか。そのためには、ユーザーとより密接し、新しい機構や技術を共に模索していく必要があります。単にものをつくるだけでなく、海外進出も含めて柔軟に対応していきたいですね。またメーカーだけでなく、今後も産官学としっかり連携をとって事業展開していきたいと考えています。

取材のあとのお楽しみ♪

名古屋グルメにもいろいろありますが、今回は名古屋名物・台湾ラーメン発祥の店「味仙」へ。去年、名古屋に住む大学時代の友人に会いに行ったときに連れていってもらい、ハマってしまったのであります。唐辛子が利いた鶏ガラスープ、麺の上にはひき肉とニラ。一見「小ぶりの丼に入った坦々麺」という感じですが、やっぱりちょっと違うんだよなあ。前回は友人たち6人と来店したのでほかにもいろいろ食べられたけど、今回は1人なのでビールと青菜炒め、台湾ちまきだけ追加。…いや、それでも女子としては「ちょっと食べすぎなんじゃないの」と言われそうな量ではあるんですけどね(汗)。

こんなモノ ★見つけました★

文化庁・登録有形文化財にも指定された本社の主要室！

レトロかつ瀟洒な佇まいをもつ旭サナックさんの本社社屋。写真は創建当時、皇室の専用貴賓室として使用されていた中央応接室です。また、会議室の天井では旧海軍のシンボルである「錨」と「橘」をあしらった漆喰レリーフを発見！う～ん、歴史を感じるなあ。